

## 目的論的、表現的、辨證法的

(承前)

高山岩男

### 八

私は前節までに『目的論的なるもの』の構造を論じ來つた。その説く所未だ明確さを缺き尙ほ論ずべき事の多くあるは私自身痛切に感じてゐる所であるが、元來目的論的と表現的、辨證法的の相違を明かにするのが主眼であつたので一應以上を以て限り、次に『表現的』と稱するものの基本構造を明かにし、後に至つて再びその聯關を明かにして見ようと思ふ。

私が此に『表現的』と稱するものは『目的論的』及び『辨證法的』と竝んで互に密接な聯關を保ち乍らも尙互に根本的な相違を有ち、世界並に人生の解釋と意義附けに於て統一的な觀點をなすもの、即ち世界觀的範疇を意味するのである。それ故私は『表現的』の下に心理學に於ける感情の『表出』や藝術に於ける表現主義の『表現』の如きものを意味するのではない。無論かゝるものも私の『表現的』と稱するものと關係をもつてはあらう。併し私は『表現的』に於て因果的とも目的論的とも全く異りそれ等

より導出しそれ等より説明する事の全く不可能な全然新しき範疇を考へるのである。無論私も『目的論的』と『辨證法的』尙進んで後に述べる如く『因果的實體的』等とこの『表現的』なる諸範疇の間に特殊な聯關の存する事を考へるものではあるが、私はかゝる綜合的見地に立つ範疇論を考へる前に先づ諸範疇の徹底的な原理的相違を明かにして見たいと思ふのである。『表現的』は、生命の全體性に亙る一つの基本的構造を云ふ。それは單なる心理學的な表情を意味するものでもなく又藝術上の特殊な流派の表現を意味するものでもなく寧ろ心的生活そのものの本質をなし藝術そのものが一般にそれに基づく生命の最も根源的な構造としての表現的構造を意味するのである。それ故『表現』とは一般に原始的な感情の表現所謂表情から複雑な人格的意志行動に至るまでの主として個人的な心的精神的表現を、尙進んでは廣く超個人的な言語、思想、法制、藝術、宗教等の所謂『客觀的精神』の概念の下に理解せらるゝものをも總括する。そして『表現的構造』とはかゝる『表現』のそれによつて成立してゐる本質的構造を云ふのであつて、之が因果的並に目的論的構造と原理的に異なる新しき特殊の構造なのである。無論『表現』を在來の表現の理論がさうである如く、因果的並に目的論的範疇より説明して説明出來ない事はないであらう。たゞそれ

は『表現』なる事態の實相を歪めるものであり『表現』なる現實生活の基本的事態を如實に明かにするものでないだけである。我々は之等の特殊な構造を虚心に認め、その各々の特殊性を明かにするのでなければならぬ。尤も『表現』なる概念は個人心理的な或は寧ろより藝術的な色彩と匂をもつ概念で超個人的な客觀的精神や實踐的な生命一般の構造を現すものとしては不適當とも云へるであらう。デイルタイ風並にジューメル風の『生の哲學』が現實的生命の獨自な表現的構造を發見してこの範疇の上に哲學を建て乍ら、なほそれを徹底し得ずして一種の浪漫主義的或は主觀主義的或は生物學主義的な曖昧の立場に止まり、實踐的な生活の眞相に喰ひ込み得ざるのも思ふにこの『表現』なる特殊な藝術上の立場を反映する言葉の魔力に左右せられたのであらう。それ故我々は『表現』なる個人的、觀想的な概念を避けて他のより良き概念を用ふべきであらうと思ふが現代哲學の共通な用語例に倣うて私は暫くその儘『表現』なる言葉を用ひたい。

生命の『表現的構造』とは先づ現實の觀想的實踐的な生命の本質的構造を意味し、次にはその具體的な動的聯關の全體を意味する。我々の現實の生活が常に實踐的なことは疑ふべからざる又證明も根據付けも必要とせざる、寧ろ一切の證明も根據

付けも此に成立しなければならぬ自明の事態なるは斷るまでもないであらう。表象的觀想的態度すら廣く生活の實踐的態度として成立するものであるが、表象そのものは行爲と本質を異にし、觀想や理論は實踐的生活の自己反省に成立して實踐とは構造上種々な相違を有つ所より、現實の生活は表象的行爲的或は觀想的實踐的生命であると云つて差支あるまい。我々の生活がその自己否定に基く自己省察の觀想的、理論的、性格をも有つ事は亦否定し得ざる事實であつて、觀想と實踐の特殊な統一に生活の自覺が成立するのである。この『自覺』が我々人間の生命の原始現象であり、その根本特徴をなす。『自覺』なくして人間的生命はない。私はこの『自覺』に、現的と稱せられるものの構造と關係が見られ、『自覺』が表現的なるものの原型をなすものと思ふ。無論『自覺』は種々の意味に解せられる。否自覺を如何なる意味に解するかによつて哲學の立場が決定されさへするであらう。併し私の考ふる所によれば『因果的』は無論『目的論的』のものに於ても『自覺』は成立し得ず、『自覺』は『表現的』並びに『辨證法的』のものに於て成立するのである。私は先づ『表現的』を『自覺』に於て明かにし、『自覺』を『表現的』に於て明かにして見よう。——現代何等かの形で『生』の哲學』を指す者が過去の哲學に於ける『存在』『自然』『理性』『精神』等の概念に代へ

るに『生命』なる概念を以てしようとする事は、この觀想的實踐的なる現實の生活の具體性に立脚しようとするからである。たゞ未だに『生命』なる表現によつて現される現實生活の眞の事態は明かとは云へない。これ一に『目的論的』と『表現的』『辨證法的』の原理的な相違の自覺に達しないが故と考へられるのである。

『意識』と云ふことがらは如何なる所に成立するのであらうか。意識は普通主觀と客觀の關係に成立すると考へられる。併しこの場合主觀と客觀或は主體と客體と稱せられるものは嚴密には種々な意味に分けて考へられなければならぬであらう。ノエシスとノエマ、作用と對象、意識と自然、或ひは、個體と環境、我と世界、個人と社會や歴史等が主觀と客觀の種々なる様態と考へられるであらう。そして前者より後者が具體的なる事は明かであり、現實の主觀客觀の關係が單にノエシスとノエマや作用と對象の如き抽象的なものでない事は云ふまでもない。純粹にノエシス・ノエマの如き或は作用對象の如き關係が實際にあるものではない。主觀と客觀の現實の關係は先づ個體と環境或は我と世界の關係と考へられねばならぬ。そして又その關係が單なる表象的認識のものでなく、寧ろ情意的行動的なる事も云ふまでもない事である。この意味で主觀客觀と云ふよりは主體客體と云ふ方が正しいで

あらう。併しこの場合も客體的對境的な環境や世界は嚴密には自然、的、と歴史、的、と他、我的、との三つの環境や世界に分けて考へなければならぬ。この客體や對境の區別に應じて主體も夫々區別せらるべきは無論である。社會が個人的人格と個人的人格の關係として他我的に考へられるよりは寧ろ客觀的精神と見られる場合の如く普遍的な歴史、的、のものとして見られるときは、歴史は社會、的、とし社會は歴史、的、として、自然、的、歴史、社會、的、(社會、歴史、的、)他、我的、と區別すべきであらう。我と自然の關係は非、我的、關係であり、我と歴史や社會との關係は、非、我的、他、我的、關係である。後者に於ける他、我的、は一般的自己の意味を有するもので未だ個人的自己の意味を有するものではない。凡て對立することは同等の資格に於て可能であり、對立する限り同等の資格と成る如く、非、我的、自然に對立する我は未だ一般的非、我的、性格を脱するものではない。眞の意味で個人に對するものは個人でなければならぬ。社會や歴史はかゝる兩極の中間的媒介的地位に立つ。或は我と歴史社會の關係が最も具體的のものとしてこゝが非、我的、自然と他、我的、人格との關係が成立する共通地盤と考へらるべきであらう。それ故、そして又この三つは云はゞ視點的な相違で現實に三つの離れた世界があるのではなき故、自然と我の關係も單に非、我的、でなく社會的歴史

史的たり得るのである。かく歴史的社會的關係態が最も具體的であるにせよ、それには自然との關係が基體をなすものでなければならぬ。何となれば凡ての超感性的な事柄も感性的なものを基體とせずしては存し得ず行はれ得ないからである。この意味では自然が社會的歴史的關係態の成立する共同媒介の基體として構造上自然的環境と私の關係が歴史社會と私の關係より基本的原始的と云はねばならぬ。同時に自然の共同媒介の上に立つにせよ自我と他我の關係は又原理上我と自然の關係と異なり、且歴史的社會的關係態を構成する基體としてそれより基本的原始的のものとして考へなければならぬ。かくの如く一方には我と自然の關係が、他方には個人的自己と他の個人的自己の關係が兩極として成立し、これらの最も基本的な關係態の上に現實の社會的歴史的關係態が成立すると考へられるであらう。主體と客觀の關係はかく種々に考へねばならぬ。併し現實は先づ直接には兩極の統一としての歴史的社會的世界と見られ、自然との關係と他我との關係も此に於て見らるゝ所より我々は直接には此より出發すべきである。それ故こゝに主體と客體とはかゝる歴史的社會的世界に於けるそれを意味する。

『意識』は主體と客體の關係に成立すると考へられる。この場合意識も、表、象、的、認

識的のもの、意志的、行爲的のものが兩極として區別され、その各々が主體と客體の種々なる特殊の關係より明かになし得るであらう。之は今の私の問題でない。觀想的意識にせよ實踐的意識にせよ、意識は一般に生命の實踐と反省の如何なる關係に、主體と客體の如何なる交渉に成立するのであらうか。意識が主體と客體の關係に成立すると考へられる場合、その關係とは關係の本質が一般にさうである如く、對立せるものの統一、或は對立以前の原始的統一を意味するであらう。對立以前にせよ以後にせよ統一なくして無論意識が成立する筈はない。併し乍らかゝる統一そのものは未だ眞の意味で意識と云ふ事は出來ぬ。例へば視覺に専らなる時、衝動の満足が達せられた時、行動に自らを没してゐる時、或は社會歴史の傳統に流される時、或は又他人と喜びを一にして共に喜んでゐる時等、そこに意識があるとは云へない。それは云はゞ無意識、或は未意識の状態に過ぎない。勿論『意識』と云ふ言葉も種々の意味に語られ、上述の如き無意識、或は未意識の心的状態も意識と云はれるであらう。併し意識とは元來客體を識ることを意味し、従つて心的現象は未だ必ずしも意識的とは云へない。意識は客體との統一、満足同一の狀況にはなく、寧ろ對立、不足、分裂の境位に成立するものでなければならぬ。併し又單なる對立、不滿、分裂その



ものは未だ意識ではない。意識は對立不滿分裂を對立不滿分裂として識る所に成立するのでなければならぬ。自然と我の對立を對立として知る時意識が成立する。欲望の達成不可能に、社會と自己の對立に、傳統に對する不滿に、我と汝の分離に、それをそれとして識る時に自己は意識を有つのである。換言すれば廣く主體と客體の對立を對立として識ることが意識であつて之が即ち對立の統一に外ならない。統一が意識であつて、主體客體の對立以外何處にも統一や意識なるものが有る譯ではない。かく主客の對立を識ることを自覺と云ふならば凡ゆる意識は自覺であると言ふべきであらう。たゞ『意識』は他者なる客體の意識であるに對し、『自覺』は主體なる自己の意識に外ならないのである。

併し乍ら『意識』がかくの如き事態であるとするとすれば、そこには既に客體に對立すると主體と、かゝる主體と客體の對立を識る主體とが考へられるであらう。この對立を識る主體は決して客體ではないと共に又主客對立の主體でもない。何となれば客體は原理上識らるゝものであつて識るものではなく、識る主體は對立になく對立を越ゆるものであるからである。併しかく對立にある主體と對立を識る主體とは異なるにせよ、又共に主體であつて同一でなければならぬ。對立にあり乍ら對立

を越え、内にあり乍ら外にある——之が紛ふ所なき自覺の真相である。單に内にありて同等の立場に對立する時自覺はなく、又單に外にありて超越的な立場に立つ時も自覺はない。『自覺』は實は主體が客體に對立し乍ら對立を知るに至る運動、そのものに外ならぬ。かく主客統一の心的状態が主客對立の境位を媒介して再び統一に至る所に『意識』が成立するのであつて、この意味で意識は凡て自覺である。自覺ならざる意識はない。

この意識や自覺の直接的な事態は他面より見るとき、『主觀の客觀化』に外ならぬであらう。主客統一の状況は勿論主客對立の状況も單にそのまゝとしてあるならば、意識や自覺ではない。客觀を客觀として定立し、主觀を主觀として定立するところに意識と自覺が成立する。主觀を主觀として定立する事は既に客觀化を意味する。對立を知る主觀の中に内在的な主客對立の境位を自ら客觀化する事によつて意識と自覺が成立するので、客觀化なくして意識と自覺が成立する筈はない。主觀の客觀化は意識と自覺の根本條件である、*conditio sine qua non*である。その場合主觀は一つなる故單に客觀を定立する方に意識があり、主觀を定立する方に自覺があるのである。こゝに『表現的』關係或は構造の第一の契機と考へられる『主觀の客觀化』

が存する。これは他より(例へば衝動や意欲より)説明さるべき事柄ではない。意識の根本條件であり、自覺と共に原始的な現象である。我々は『意識』の存立を以て直ちに『主觀の客觀化』があると云ふより外なく、自覺の事態を以て指し示すより外ない。

我々はかゝる『主觀の客觀化』に基く意識や自覺を以て精神の徵表とする事ができるであらう。『精神』なる言葉も種々の意味で語られるであらうが、眞實には意識や自覺を有つ生命を云ふべきである。それは今述べた所より明かな如く客體ではなく、客體との對立を識る主體即ち自覺である。それは根源的に運動であつて實體ではない。かゝる精神の本性はそれ故自己否定性にあると云ふべきで、この點より合目的々な有機的生命と區別される。合目的々な衝動感情意志等の有機的生命に『主觀の客觀化』はない。即ち自己否定性はない。それらは單に直接的連續的である。従つてそれらに意識や自覺が成立する筈はない。有機的生命は如何に對立の境位に遭遇しようとも只管對立の境位を破らうとするだけであつて、對立を對立として知る事はないであらう。この意味で合目的性の世界に自覺はあり得ない。自覺は合目的性を越えた所に初めて成立するのでなければならぬ。自覺は反衝動的

な即ち自己否定的な觀照的態度に先づ成立するのである。或は執着的結合よりの解放の態度に成立すると云つてもいゝであらう。人間の具體的生命はかゝる意味に於て精神的であり、精神なる所に他より區別さるゝ人間の本來的な性格がある。たゞ精神の自己否定性は單なる自己自身よりの否定性でなく、客體よりの否定性なる事は注意せねばならぬ。併し單に客體よりの否定に精神の自己否定は成立しない。精神の自己否定性は客體に即した自己否定性である。そしてかゝる自己否定性以外に何處にも精神が實體的に存在するのではない。——『表現的なるもの』は先づかゝる精神の自己否定性による『主觀の客觀化』に成立するのである。——

『精神』は表現的構造のものと考へられ、その本性たる自覺が『主觀の客觀化』に成立し、主體客體の對立的境位がその中に包まるゝとするもかゝる自覺は未だ眞實の自覺ではない。恰も『無知の知』が眞實の知の出發點であり得ても未だ眞實の知自體とは云へず、自己の限界の自覺が限界超越の發足點ではあつても積極的な限界の超克と云へないといふ一般である。自覺が無限に繰り返し進行し得ると云ふ單に形式的な『惡無限』の可能性を以ては、未だ自覺の眞實の内實的無限性は保證され得べくもない。換言すれば眞の自覺は單に表象的觀照的でなく、行爲的實踐的でないければ

ならぬ。自覺は先づ直接には生命の表象的觀照的態度に成立するのであるが、生命が常に情意的實踐的なると同じく、次には行爲による自覺に進まなければならぬのである。是に於て自覺は主客對立の完全なる内在化に、換言すれば客體の完全なる内在化を行爲的に實踐しなければならぬ。自覺は前に云ふた如く意識である。意識に於ける客體の完全なる否定、即ち主觀化なくして自覺は成立し得ぬ。而も意識とは客體の客觀化的定立にあつた。その客觀化的定立の基礎は主觀に存するものではなく、主觀に對する客體の超越性にある。客體は主觀に對して全くの他でなければならぬ。主客の統一に意識なき如く超越的客體なくして意識も自覺も元々成立する筈はない。客體は意識や自覺に内在化し盡されず包み盡されぬ超越的殘基である。この事を實踐するものは表象的觀照的態度ではなく寧ろ却つて行爲であらう。自然に働きかける時、歴史や社會に於て行動を決する時、客體の超越性は既に豫想されてゐると共に超越性は又行爲によつて保證されるのである。——然るに意識も自覺も客觀化的定立による客體の内在化に成立した。是に於て自覺とはかゝる超越的客體内在化の無限の實踐でなければならぬ。實踐は意識よりの超出を意味する。そして實踐とは實はかゝる客體の超越性の超克に外ならぬのである。生

命の實踐は即ち『客觀の主觀化』を意味する。自覺はたゞかゝる『客觀の主觀化』の行動によつてのみ深められ完成されるのである。こゝに『表現的』關係並に構造の他の契機をなす『客觀の主觀化』が存する。――

併し乍らかゝる『客觀の主觀化』の實踐が意識を超出する事によつて自覺の境位を離れる事は云ふまでもないであらう。意識と自覺を越えた生命の行動は是に再び内在化された客體を客體として定立する反省に進まなければならぬ。換言すれば『客觀の主觀化』は再び『主觀の客觀化』に進む。是に實踐の反省が成立するのであつて、反省は自覺の深化と具體化を現すのである。『主觀の客觀化』が如何なるものなるかは前に述べた如くである。かくして成立する『主觀の客觀化』と『客觀の主觀化』の限りなき轉移の過程が實は具體的な現實的生命の自覺そのものに外ならず、精神的生命とはかゝる自覺に外ならぬ。それは觀照的實踐的表象的行動的等の特殊な分裂的統一的過程と云ひ現す事も出來よう。それは一面に於て生命の自己内反省であると同時に、他面に於て超越的客體自然及び他人に即する生命の『發展』である。『表現的なるもの』とはかゝる動的發展聯關の全體を意味する。それ故『表現的なるもの』に於ける發展が、單に連續性のみを本質とし未だ觀照的とも實踐的とも

云へぬ『目的論的なるもの』の生長と全く意義を異にし、一種の非連續の連續なる事が明かであらう。理論も實踐も意識も自覺も皆先づこの表現的構造より明かにさるべき事も明かであらう。生命とはかゝる表現的構造の生命である。——而して單に理論的な立場に還元して表現、了解と稱せらるゝものは實はかゝる生命の『主觀の客觀化』と『客觀の主觀化』に基いて成立するに過ぎないのである。

『主觀の客觀化』と『客觀の主觀化』はかく生命に於て離すべからざる統一的發展聯關をなすのであつて、前者にその觀照的態度が成立し、後者にその實踐が成立する。生命とは兩者の發展的統一である。單に客觀的なるものが生命なのではない、又單に主觀的なるものが生命なのでもない。否主觀或は主體なるものが存在するのではない。主觀或は主體を何等かの意味に於ける實體的の存在者と考ふることこそ、後に述べる如く、表現的とは異なる實體的範疇なる對象的形式によつて抽象的に思惟する事を意味するのである。過去の形而上學に於ける『心』なる實體は實は對象的思惟の構成物に外ならないのである。人間の生命は常に主觀的客觀的或は觀照的實踐的な自覺そのものに外ならず、之が單なる有機的生命より區別された精神的生命であつて、人間は具體的には肉體的有機的精神的な生命統一體なのである。

私は主體と客體の關係を人間と社會的歴史的世界の關係並びに歴史の社會的世界に於ける我と自然、自我と他我の關係として漠然と見て來た。併し之以外に種的に異なる自然と人間、個人と個人の兩關係を各々綿密に考察しなければならぬ事は前にも云ふた如くである。社會的歴史的世界は既に觀念的契機を含む普遍的實在として、その基礎に、自然と人間、個人と個人の關係が考へられなければならぬ。社會や歴史は自然と個人との兩關係態に成立するものと考へ得るのである。個別的な個人と自然をとり去り行けば、肉體の一片一片を剝し行くと、人間がなくなる如く、社會や歴史は客觀的存在として何處にも捕へ得ないであらう。而も社會や歴史が普遍的な且又客觀的な存在なる事は否定し得ない事柄である。此に社會や歴史のもつ觀念的契機と主體的意義が知られるのであるが、私はこの問題に搦む表現の領域に入るに先つて、先づ人間と自然の關係を基礎とする『表現』の分析を行つて見よう。その場合私は一つの雛型に頼りたい。それは根本的に人間と自然の關係であり乍ら、その關係(觀照的實踐的關係)を單に抽象的な理論的な態度に還元したものの、即ち表現解釋の關係に於ける雛型である。現代解釋學の下に考へられるこの表現解釋の(而も根本的には一種の平行論的關係に立つ)聯關が、具體的な主體と客體の現實的實



踐的關係を在來の哲學の出發點であつた表象的認識的態度に投影したものである事は前に言及した所よりも明かであらう。そしてこの雛型による表現の解釋が十分に發展の契機に於て考へ得ざる事もこゝより當然であらう。併し私はこの雛型が、かゝる抽象的見地に立つ故却つて具體的な生命の表現的構造の解明に役立つ事を信じて疑はない。たゞこの雛型による解明が、個人と個人の關係に於ける表現的なるものに迄適用し得るか否か、根本的にはこの關係が單に表現的關係によつて盡し得るか否かは、又別個の問題として自ら問題化され行くであらう。

## 九

現代哲學に於て一般に『表現』と稱せらるゝものは廣く認識的立場に於て考へられ、體驗表現了解なる聯關の下に解釋學に於て問題とされる。その場合表現とは體驗の客觀化された客觀的形態と考へられるであらう。表現とは即ち、自然的肉體のものより精神的人格のものまで、又個人的のものより超個人的のものまで、一般に內的體驗が單に內面的主觀性の状態に止まらず客觀的存在に自らを外化し客觀化したものを意味する。換言すれば感性的自然的存在に即して客觀化された生命の客觀的存在形態を我々は普通表現と云ふ概念の下に理解するのである。

そして逆に感性的に與へられた客觀的表現を主觀の認識にもち來す事が一般に『了解』或は『理解』と稱せられ、特にその技術的なるものを『解釋』と稱する。所謂解釋學がかゝる技術的な解釋術の組織なる事は周知の如くであらう。併し乍ら解釋學は元來純粹な學問であつて、一般の精神科學と均しく、生命の自己否定に基く自己省察に成立するものである。元々全體的生命の一面の様態なる表象認識の立場に立つて凡てをこの立場に投影して考ふる認識論としての解釋學が成立する前には自體に於て理論的實踐的なる生命がなければならぬ。學は無論それ自身に於て獨立且獨自な論理を有つにせよ、實は生命の自己反省の構造に基いて成立するもの、この意味で學は生命の一面に過ぎない。種々なる學はその現實的地盤たる生命の種々なる様式に依存すると考へられる。解釋學は生命の體驗表現了解の全面的構造を明かにしやうとするであらうが、それは既に表象認識の見地に還元されて後に明かにされるのであつて、この意味で解釋學が體驗表現了解と稱するものが、私が前節に論じた生命の『主觀の客觀化』と『客觀の主觀化』と原理上異なる事は明かであらう。我々はこの所を一應嚴密に區別しなければならぬ。私が『表現的』の構造や關係と云ふものはかゝる認識論の見地より見られた生命のそれではなく、生命それ自體に於

ける構造や關係を意味するのである。それ故前に述べた如き生命の獨自な發展的  
聯關が解釋學に於て表現と了解の靜的な平行論的關係に轉ずる事も理解されるで  
あらう。併し生命それ自體の表現的構造も先づ解釋學的方法によつて明かにさる  
ゝより外はない。解釋學も漸次生命の表現的構造を如實に明かにする事を以て理  
想としなければならぬ。私はかゝる立場に於て所謂『表現』を分析して見よう。

『表現』は如何なる契機より成立してゐるであらうか。我々は先づ主觀的方面と  
客觀的方面を區別しなければならぬ。第一に表現の客觀的方面を考ふるに、そこ  
も嚴密には内實たる『意味』と、意味を荷ふ感性的な『質料』とが區別されなければな  
らぬ。無論兩者相離れて獨立に存するものではない、分析は理論的反省の所産に過  
ぎない。併し表現の『意味』と『質料』が本質的に異なる事は誰しも否定出來まい。『意  
味』は表現せられたものである。之は客觀的のものであるが、實在的な客體ではな  
い。『意味』こそ眞の意味で觀念的のものである。觀念的のものは實在的客體を離  
れて實存し得るものではないが抽象的に思惟の對象となり得るであらう。

次に表現の主觀的方面を考ふるに、そこにも嚴密には『體驗』と『作用』を分けなけ  
ればならぬ。『體驗』とは、表現するものであつて、心的のものではなく作用的のもの

ではない。『作用』とは心的肉體的な作用である。無論この『作用』は與へられた表現に存しないであらう。併し作用のみならず『體驗』も存しないのであつて、體驗は表現された意味に寫し出されてゐるに過ぎない。この『體驗』と『作用』を分つ事も甚だ抽象的であり、殊に『作用』の如きは表現に於て最も非重要な契機と考へられる。併し『作用』は實は現在に於ける『了解』の作用として一應考ふべきであり、體驗と作用は本質上同一のものでない。無論作用を離れて體驗はあり得ず、體驗を離れた作用の如きものはない。併し作用は體驗に成立するもので、體驗は一々の作用に盡きるものではない。體驗を作用の統一者の如く考へる事は未だ『實體的』範疇の見方を脱せないが、體驗と作用の關係は人格と行爲の關係に似て考へ得るであらう。『作用』は心的なると同時に常に肉體的である。かゝる心的肉體的『作用』の媒介によつて『體驗』は感性的な『質料』に自らを客觀化する。此に『意味』が成立するのである。意味は即ち體驗の意味に外ならない。觀念的にして普遍的な『意味』が主體と客體を媒介し、又主體と主體を媒介する共通地盤である。我々はかゝる意味或は意味を荷ふ質料によつて、換言すれば表現によつて交渉し合ふのである。そして意味と體驗を媒介するものとして作用が考へられる。『表現』とは具體的には以上の四つの

契機の統一として理解さるべきであらう。

次に『體驗』と『意味』の間には特殊な『寫し出す』と云ふ關係が存する。この關係なくして表現的關係はあり得ない。それは表現的關係の一つの本質をなす。この『寫し出す』關係はその眞實非眞實、正直不正直等の事實を以て否認することはできない。何となればかゝる事實は既に『寫し出す』ことに基きそれを豫想して初めて成立する事柄であるからである。『この寫し出す』關係は一種の全體と部分の關係より考へる事ができるであらう。

然らば『了解』或は『理解』は何處に成立する事態であらうか。『表現』の四つの契機のうち、心的肉體的な『作用』は直ちに消え失せ、『體驗』は『意味』に客觀化せられた以外何處にも存しない。『體驗』と『作用』は時間的のものとして消え行く。残るものは『意味』と『質料』とである、具體的には『意味』を擔つた『質料』である。『意味』は普通考へられる如く心的な『作用』を離れた無時間的のものであらう。のみならず『體驗』にも超越的なものと云へやう。之に反して『質料』は時間の中にあるもので消失する事が可能である。『質料』が消失した場合我々が了解し理解する途は絶える。了解や理解は先づ與へられた質料が單なる質料でなく意味を荷つた質料なる

事を豫想して可能となる。現實の存在はそれが了解され理解さるゝ限り單なる純粹の質料ではなく常に意味を有つた質料なのである。現實の存在はこの意味で凡て觀念的實在的存在と云ふべきであらう。——了解或は理解とは與へられたかゝる感性的存在によつて『意味』を理解するか、或は進んで『體驗』を了解するか、何れかでなければならぬ。理解とは客觀的且觀念的なそして又普遍的な意味の理解であり、了解とは意味を意味たらしめてゐる主觀的實在的なそして又個別的な體驗の了解である。無論これは極端な場合であつて實際にかゝる極端な場合がある譯ではなからう。併し我々は一應分けて考へる事が出来る。<sup>註</sup>

註 Freyer, Theorie des objektiven Geistes に於ける Gegenständliche Hermeneutik とは以上區別した場合の『意味』の『理解』の學であり、氏はかゝる事が可能と考へる。氏の云ふ『客觀的精神』とはかゝる觀念的な意味の體系なのである。

理解とは如何なる事態であるか。それは『意味』の客觀的普遍性を豫想して初めて成立する。然らばこの意味の客觀的普遍性は何處に成立するのであらうか。或はかく問ふことは許されざる事であつて、意味は元々客觀的普遍性をもつものと云ふでもあらう。併し先づ第一に意味の客觀性は然かく自明の事柄ではない。意味は觀念的のものである。それは我々の時間的な心的作用を離れてそれ自體に存立

するものと考へられよう。併しかゝる事は元來一種の要請に過ぎない。意味が時により人により處によりて變ずる事は疑ふべからざる事實である。意味は擔はれてゐる質料を離れて存在し得ざると共に現在の理解する體驗を離れても存立する事ができない。併し種々に理解されるにせよ共通の意味として理解の對象となるにはそれ自體に於ける客觀的存立を有たなければならぬ。意味は即ち眞實には主觀的客觀的のものである。そして之が觀念的なるものの本性であつた。觀念的なる意味は實在的ではないが、單に客觀的なるものでなく同時に主觀的のものなのである。主體と客體の結び付く、或は前に述べた『主觀の客觀化』と『客觀の主觀化』の一致する所に觀念的のものがあり、此は主觀的でも客觀的でもなき『第三領域』なのである。

かく觀念的な『意味』は單に客觀的でなく同時に主觀的なのである。併し意味は元來體驗の意味として成立の地盤は體驗でなければならぬ。意味は體驗の客觀化として初めて成立するのである。そしてかゝる客觀化にその普遍性が成立する。普遍性はもともと客觀的なるものの事柄であつて主觀的なものに普遍性は無縁である。(主觀的のものに論理的な意味に於ける普遍性、或は逆に特殊性を考ふる事は

既に對象化的觀方に立つてゐるのである。意味の客觀的普遍性はかくして體驗の客觀化による觀念的存立として成立するのである。そして體驗が失はるゝに従つて益々その獨立的存在性と自己法則性が顯となるであらう。此に至つて理解は却つて意味に従はねばならなくなる。普通云はれる意味の超越性とはかゝる事態のみを云ふたものに過ぎない。

此より意味の理解と體驗の了解の關係が明かであらう。理解が單に客觀的普遍的な意味の理解であり、解釋學の解釋がかゝる理解であるとするならば、人と時と所によつて異なる意味の特殊性はあり得る筈がなく、廣き意味の論理學や文法學の外に特に解釋學が必要な理由はあり得ないであらう。この事情は非理論的領域に行くに従つて益々明かである。意味を單に客觀的普遍的とする立場では、意味の特殊性は理解し得なく、まして新しき理解が常に客觀的普遍的とする所以は了解し難い。而も實際意味の解釋は常に現在の新しき解釋なのである。それ故意味は體驗の獨自性を寫し出した特殊の意味と考へられなければならぬ。意味の特殊性の根據は體驗に存しなければならぬ。それ故表現の理解は單に意味の理解に止まらず體験の了解なる事が明かである。併し過去の他の體驗の了解は如何にして可能であらうか。有



るものは共通不變な意味であつて體驗は既に無く他のものである。是に於て體驗の了解とは實は意味の理解に加ふるに『作用』の再遂行によつて得られた自己の體驗の了解でなければならぬ。體驗の了解は畢竟現在の自己の體驗の了解として成立するより外ない。是れ過去の理解が常に現在に成り立つ所以である。——併し又單なる自己現在の體驗は飽く迄體驗であつて了解ではない。了解はすべて體驗が客觀化せられて後成立する。こゝに自己現在の體驗の了解は新なる意味の理解とならなければならぬ。こゝより了解は凡て再體驗であると云ひ得ると共に、體驗意味了解の聯關が單に抽象的な平行的關係に立つものでなく一種の發展的聯關をなす事がわかるであらう。是れ前節に述べた生命の發展と對應し、實はこの事態を反映するのであつて、生命に於ては自覺の發展につれて主體と客體の對立的形態は新たに成り行くのである。自覺の發展にも拘らず客體の不變恒常を主張するは抽象的思惟の『實體的』範疇による構成に過ぎない。

以上論ずる所より明かな如く『表現』に於ける『體驗』と『意味』は特殊な聯關をもつもので、單に靜的な對立でなく動的な發展に於て見られなければならぬ。意味は主觀的な特殊の體驗的意味より漸次客觀的普遍性を有つ意味となる。純粹に客觀

的普遍的な、従つて理解されようがされまいが其自體に存立すると考へられる超越的な意味の如きは要請に過ぎない。かゝる獨立化の方向に意味特有の自己論理性と自己法則性が成立し、意味は體驗の如何ともなすべからざるものと成る。即ち意味は『生命以上』のものとなる。——之が生命本然の相であつて、社會的歴史的世界の共同性もかゝる觀念的な意味に成立し、社會歴史とはかゝる觀念的共同性を有しそれを荷ふ所の自然と人間、個人と個人の實在的關係態に外ならぬのである。——

私は以上、普通に『表現』稱せられるものの構造を或る雛型によつて明かにしようとした。この雛型が主として自然と人間の關係に於ける表現の雛型なる事は前に斷つた如くである。而もそれが生命そのものの構造と云ふよりは寧ろ既に表象認識的立場に映された生命の構造なる事も前に云ふた如くである。元來『表現的』立場は未だかゝる立場を逃れない所に固有の本性を有つのであつて、従つてそれは分別的立場を離れず、この立場を越える時自ら辨證法的立場に推移する事は漸次明かとなるであらう、現代の『生の哲學』は未だかゝる立場に止まる。こゝより『生の哲學』が生命の最も具體的な姿である實踐的、性格と超越的、性格を見失ひ、觀想的且內在的立場に止まるに至るのである。この『生の哲學』の抽象性は『表現的』のものの本

性と限界を明かにするに従つて益々顯となるであらう。——併しこの雛型は雛型なる故當然抽象性は免れ得ないとするも、表象的認識的の立場の表現(例へば藝術作品や歴史の資料等)並に意志的實踐的の立場の表現(例へば勞働の所産たる商品や勞働の要具たる道具等)に共に通ずる雛型なのである。そして又一定の偏曲と具體化によつて非自然的或は非物質的なる表現例へば言語法制慣習等)の本性をも明になし得るとも思ふのである。——併し之が生命自體でなく解釋學的立場に於ての事なる事は再び注意しなければならぬ。

そして私の考によればかゝる解釋學的立場より理性の表現的構造なるものを初めて自覺したものはカントの『純粹理性批判』である。

## 十

カントの『純粹理性批判』が初めて解釋學的立場より理性の表現的構造を明かにしたと云ふこの提題を論證するに先つて、私は『表現的』範疇をもう一つの他の世界觀的範疇より區別して置きたい。私は從來『表現的』を主として『目的論的』より區別し又『辨證法的』よりも區別さるべき事を主張して來た。併し之等より區別さるべきもう一つの他の世界觀的範疇が存する。それは即ち、『實體因果的』範疇である。

私は之を『表現的』範疇より區別する事によつて一層カントの主旨を徹底し一層カントの特徴を明瞭にすることができると思ふ。私の考ふる所によると哲學の類型は根本的な世界觀的範疇の類型に歸着し、之等諸範疇の構造と制限を明かにする事によつて各々支配の領域を決定し、相互間の實在全體に關する支配の權限の當否を批判し得て哲學の類型を體系化することができるのである。私は今かゝる世界觀的範疇論を試みようとするのではなく、たゞ目的論、表現論、辨證法の三つに互つて之を行つて見たいと思ふに過ぎない。無論世界觀的範疇は之ら三つに盡きるものではない。私は之等三者特に『表現的』範疇を明かにするために、『實體因果的』範疇の原理的な特色を極く簡單に述べて置きたいと思ふ。

『實體因果的』範疇は『實體的關係』と『因果的關係』を結び付けたものであつて、實際に於て兩關係が容易に結び付く所より結合したに過ぎない。併し兩關係は嚴密に區別さるべきものであつて、結び付かぬ場合も可能であらう。今は種々なる可能態の研究は棄て、省みない。實體的關係とは一般に實體とその現象の關係であつて、實體と偶有性、實體と屬性等の關係は之に基いて考へられるのである。この實體的關係が大體カント以前の近代形而上學の根本範疇なる事は否定出來ぬと思ふ。

カント哲學の功業は形而上學がかゝる實體的範疇に立脚するの不可を立證した所に存するのである。そしてこの實體的關係は因果的關係と一應區別せらるゝと共に『相互規定的關係』とも區別せらるべきで、相互規定的關係が眞實には有機的合目的性に於て考へられる事は前に述べた。カント以前の古き形而上學は凡て對象形而上學として『實體因果的』範疇か或は『目的論的相互規定的』範疇かに歸着せしめる事もできようかと思ふ。前者の典型はスピノーザでデカルト等もそれに數ふ可く、後者の典型がアリストテレスなる事は前に述べた如く、ライブニッツも之に數ふる事ができよう。之に對して『表現的』範疇と『辨證法的』範疇は對象形而上學の範疇ではない。對象形而上學は一切を對象存在と思惟して出發する所に特色を有し、之に對し表現的並に辨證法的範疇は原理上主體と客體の關係に成立する所に根本特長を有つのである。この辨證法的範疇も單純に主體を重んずるか或は客體を重んずるかによつて(例へば前者の代表はヘーゲル、後者の代表はマルクス)二つある如く思はれるけれども、それ等は共に辨證法に達せざるもので具體的には『表現的辨證法的』範疇として成立するものである。

因果關係はアリストテレスが原因を種々分けた如く廣汎な意味を有ち、色々の意

味で語られるであらう。形相質料の見地より目的論的關係に行く許りでなく、實體的相互規定的等の關係も因果關係と見る事ができよう。併しこゝには普通原因と結果の兩方向に無限の連鎖を成すと考へられ、結局は世界觀として機械觀に歸結する所の範疇を考へよう。かゝる因果の範疇は無論客體的存在の存在様式に過ぎない。主體的东西をこの範疇で考へる場合は主體でなく實は客體化された客體的存在として見られてゐるのである。それ故この範疇は主體と客體の關係に元々通用するものではない。無論この範疇を唯一として世界觀的範疇に迄廣める時、主體客體の關係も因果的に考へられるであらうが、この場合も同じく實は客體と客體の關係に過ぎないのである。かゝる立場より(在來の思惟が未だ抜け切らぬやうに)自由を肯定しようと(之は實際には成立たない)或は否定しようと、元々問題にならないのである。因果の關係は元來純粹な機能概念と考へ得るであらう。原因と結果の間に秩序的な相違はあり得ない。この原因はたゞこの結果の原因であり、この結果は唯この原因の結果である。そこには何等實體概念を容れる餘地なく、たゞ透徹な機能的關係があるに過ぎない。この立場に實體的な物體は考へられず、物體も機能に解消される外ない。自然科學の發展は之を證するであらう。作用反作用の如

きもかゝる立場で考へられるに過ぎず、かゝる立場で觀念論が成立つと假定するならば自我なるものはなく、自我は瞬間瞬間の觀念となる外ないであらう。——かゝる立場で初めて原因と結果は無限の機能的な連鎖を構成するのである。

併し我々の思惟は因果の無限の連鎖に於て最初の原因と最後の結果を考へようとする。所謂第一原因としての實體と、所謂目的はこゝに初めて考へられるであらう。第一原因を考ふる時我々は既に因果關係を棄て、實體的關係に移るのである。合目的性と實體性こそ正反對の立場に立つのである。普通因果關係を逆にした所に目的論が成り立つ如く考へられ易いが、それは實は、目的、意識、行動であつて合目的性ではない。目的意識的行動と合目的性とは原理上全く異なる。それは意識的なる所より推察出来る如く表現的の關係を既に豫想して成立するもので、因果關係とは秩序を異し、因果關係を包みて成立するのである。誰が甲より乙、乙より丙、丙より丁等への因果の連鎖を承認せずして丁なる目的を實現しようとする行爲するであらうか。行爲或は進んで自由の如きも因果關係と同一秩序に成立するものではない。それらは因果的、實體的、合目的々等の範疇とは全く異なる高次の範疇で考へられる事柄なのである。

合目的性と實體性は同一秩序に就て構造を逆にする事によつて考へられるのであつて、共に因果的な機能關係が非完結性をもつに對し原理的な完結性を有つと云ひ得るであらう。非完結的な所に實體の本性はあり得ない。實體は完結的なもので、それ自體に於て考へられそれ自體より存在するものでなければならぬ。實體と現象の間には秩序的な相違がなければならぬ。之が現象の實體に對する關係が偶有性として考へられる所以である。因果關係が悪無限的な連鎖をなす平面的關係であるに對し、實體的關係は眞無限的な、即ち包擁的完結的な立體的關係であると云へよう。精神や生命の如きに眞無限的な姿を考ふるものは未だ對象形而上學的な實體的範疇の舊套を逃れざるものである。この事は合目的性に就ても同様に云はれ得るであらう。合目的性に於ても目的は之は普通意識に與へられず、この意味で『目的なき合目的性』であるが、この有機的合目的性が原理上は客觀的目的を有たねばならぬ事は前に述べた如くである。原理的な完結性を有する。併し目的は先づ主觀的な潛勢的狀態として存し、従つて合目的性に於ては發展生長が思惟せられ、この意味で實體的關係とは異なる。實體的關係に於ける現象は云はゞ合目的性に於ける發展生長等の具體化の逆の本性をもつ。それは抽象化或は枯渴化衰亡化の流出の



如きものでなければならぬ。この意味で合目的性に於て考へられる眞無限即ち具體的普遍と云はれるものは具體化的發展的のものでなければならぬ。ヘーゲル哲學の立場が未だかゝる立場の名残を留めてゐる事は前に述べた如くで、かゝる立場は表現的辨證法的立場とも異り未だ精神の立場ではない。

實體と現象の關係は偶有的と考へられ、偶有的な現象の存否は實體の本性に係り無きものと考へられるであらう。併し偶有性も實體の現象なる限り兩者の關係は實は偶有的でなく必然的でなければならぬ。併し必然的な現象は最早や現象でなく實體のものである。そして現象なき限り實體の意味はなく、實體現象の關係は此に終熄して同一秩序の關係、即ち相互關係に推移しなければならぬ。此に相互、规定的關係が成立して合目的性へと推移するのである。

『因果實體的關係』は主として自然の『相互规定的目的論的關係』は主として生物、生命的の存在様式をなすものと考へ得るであらう。人間の即ち精神的、生命が以上とは異なる『表現的關係』に於て成立する事は前に強調した如くである。我々の生活の様式即ち觀照と實踐、表象と行爲等はこの關係に初めて現れる。この『表現的關係』は決して『實體的關係』と混同さるべきものでない。カントは『實體的範疇』を形

而上學より排除した。新らしき形而上學は對象形而上學と異つて先づ別種の『表現的辨證法的範疇』に立脚するものでなければならぬ。かゝる範疇の組織は蓋し至難な事業であらう。何となれば我々は長年の間因果的、實體的、目的論的思惟に慣れて之以外の思惟を殆どなし得ないからである。たゞ、辨證法的或は表現的の範疇に遭遇しても純粹に徹底出來ず皆因果的か實體的か目的論的かの思惟を混入して奇怪な混淆物に終つてゐる。『精神』や『自然』に代へるに『生命』を以てする立場は表現的及び辨證法的の範疇を純化徹底するのでなければならぬ。

私に因果的、實體的、目的論的、表現的、辨證法的等の諸關係は、形式と内容(或は形相と質料等)、根據と歸結、全體と部分等の諸關係とは原則的に異なるものとして區別せねばならぬと思ふ。前者はそれ自體に於て世界觀的範疇、即ち哲學的範疇であり、後者は論理的範疇である。論理的範疇は未だ世界觀的觀點より自由であり従つて共通である。世界觀的範疇はかゝる共通な論理的範疇によつて明かにさるべきものであらう。併し論理的範疇は内實的には各世界觀的範疇によつて各々異なる如く解せらるゝのである。例へば全體と部分の關係は目的論的範疇に於ては潜在より顯在への發展として動的のものとして考へられ、實體的範疇に於ては靜的なものとして部分の意味が消え、因果的範疇に於ては加算的に考へられ、表現的範疇に於ては客觀化による部分の獨立化全體化の動的過程に於て考へられるが如くである。かゝる關係の詳細なる研究は將來に譲らなければならぬが、こゝに在來の論理的範疇は元々客體存在間の關係を現すより、主體客體間の生命の相を現す事が原理的に不可能でないかと云ふ疑問が生じよう。確かに之は不可能の事であつて、在來の論理は凡て對象論理であり、『生命の論理』は未だ嘗て存した事がない。(假令言葉はあつても Dynamic des Lebens の如く相互規定的關係の對象的範疇を出でない。)論理が元々思惟の論理であり、『思惟は對象』の思惟なる所より『生命の論理』の如きは元來不可能とも考へ得るが、哲學が成立する限り何等か論理がな

ければならぬ事は明かである。その際は論理的範疇の種々の意義を明かにすると共に、對象的關係を否定する事によつて、たゞ否定的に規定するより外ないであらう。この事は實際に可能である。——ヘーゲルの論理學は理論的範疇と世界觀的範疇を混同するものである。

私は次にカントの『純粹理性批判』より表現的なるものの構造を明かにし、進んで『實踐理性批判』よりその制限を明かにし、表現的立場の種々なる問題を論じて見よう。

(未完)